石川・中屋（なかや）サワ遺跡（第二五号）

1　所在地　石川県金沢市中屋町・福増町

2　調査期間　二〇〇一年度調査　二〇〇一年（平13）六月～二〇〇二年三月

3　発掘機関　金沢市教育委員会

4　調査担当者　谷口宗治・前田雪恵・向井裕知

5　遺跡の種類　集落跡・荘園跡

6　遺跡の年代　縄文時代～近世

7　木簡の釈文・内容

中屋サワ遺跡出土木簡については、本誌第二五号で判読可能な二点について報告を行なった。今回は、その後の整理作業により木簡と判明した溝SD六五出土の第七号木簡について追加報告する。

溝SD六五は、調査区東辺で検出した幅三m前後の東西溝で、既報告木簡が出土した川SD三〇と、調査区東端で西岸を検出した川SD六六・七五を繋ぐ可能性がある。縄文時代から中世に至る遺物が出土したが、主要時期は奈良時代末から平安時代前半とみられる。

(1)　「□マ□□赤米五斗二升」　138×17×3　051　第七号

赤米の付札木簡である。上端は圭頭状に、下端は剣先状に整形している。本遺跡の約四〇〇m東方に所在する古代荘園遺跡、上荒屋遺跡から出土した木簡（以下、上荒屋木簡とする）に類似品があり、これから類推すると、状態が悪く判読できない上半部には人名が記載されている可能性が高い。下半部には米の種類と量を記す。上荒屋木簡には「黒米」や「白米」がみえるが、「赤米」はみえない。

上荒屋木簡はすべて河川SD四〇から出土しており、厳密な年代比定は困難であるが、出土地点及び墨書土器の「庄」の字体により、ある程度の年代推定は可能とされる。それによれば、今回出土した木簡は、記載内容や形態からみて、上荒屋遺跡の「綾庄」段階、すなわち八世紀末から九世紀初頭の所産とみられる。

中屋サワ遺跡では、調査範囲内において荘家クラスの大型建物は検出されていないが、今回確認した木簡は、記載内容からみて荘家にて量目確認・記載後に廃棄された木簡と推定される。本木簡の存在から、荘家が近隣に所在した可能性を指摘することができる。

8　関係文献

金沢市『中屋サワ遺跡Ⅲ』（金沢市文化財紀要二四二、二〇〇七年）

（向井裕知）